



<Adam & Eve> 1917-18  
G. Klimt (1862-1918)

聖書における人間ドラマのはじまりは、人間創造です。神の似姿としての男・アダム（土という意味）、女・エバ（命と言う意味）という原型を示しました。塵に帰る人間でありながら、命を生み出す人間、死と生を身に負った姿です。

この男女はすべてが備えられた神の楽園で働き、すべてを守るよう命じられます。「産めよ、増えよ」と神の祝福を受け、無垢のまま、愛し合い、一体となる、という愛と性の美しい関係が描かれています。

ところがそのような日々は束の間で、すぐに二人は欲望に捉えられ、神を裏切る場面が始まります。神を避けて、隠れる二人になります。神の審きは楽園追放でした。そこから人間の苦悩が始まるのです。

エバは「必ず死ぬ」と言われた神の言葉を「死んではいけないから」と、勝手に変更してしまいます。禁断の「善悪の知識の木」を見て、欲望に突き動かされます。彼女の欲望は、(1) おいしそう（食欲）、(2) 目を引く（美的欲求）、(3) 賢くなりそう（知的関心）という3点でした。そしてアダムにも同じ体験をさせたいのです。聖書を書いた人は、女性の弱み、あるいは本能(?)を知っていると私は感心してしまいます。

一方、アダムはエバと一緒にいるだけで良かったのでしょね。渡されると、黙って、受け取って、食べたのです。「女の言うとおりにした」と、あとでアダムは神に弁解しています。これも男の姿でしょうか。妻の用意する食事をただ食べるだけの夫はそこいら中にいます。

二人は神の言葉を軽く考え、神の命じた、たった一つの禁断を、自分の欲望のために、また、無自覚、無意識に破り捨てたのです。

神はアダムに「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた」と叱責します。それ以来、アダムには、女の声に従いたくないというトラウマが生じます。そしてアダムは女を支配しなければならないという思いになるのです。私の想像では、男性の欲望は(1) 支配欲、(2) 勝利欲、(3) 地位欲 であり、この強迫観念に縛られているような気がします。神はエバに「お前は男を求め、男はお前を支配する」運命だと告げます。ここに葛藤が生まれます。

これが人間の原型として創造されたアダムとエバの物語ですが、神の前で、限りある命を生きる姿、素晴らしい祝福の姿、悲しい罪の姿を、神話的な物語の形で、私たちに伝えています。

さて、苦悩の原因を作ったのは、女・エバであるとみなされてきました。パウロの、  
… なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。しかも、アダムはだまされませんでした。女はだまされて、罪を犯してしまいました。(テモテ12:13~14) …

この言葉によって、(1) 創造の順序が優劣の序列を示す、また、(2) 男は騙されなかったと2点を強調して、女を低く見なしているのです。そうでしょうか。アダムの家系は三男セトによって継承されていきますし、アダムは、考えもせず、無自覚、無責任に、いとも軽く神の命令を無視しました。いずれにせよ、欲望に支配されることが、苦悩、罪の世界に迷い込むことになるでしょう。